

東京・千鳥ヶ淵で
全戦没者追悼法要

終戦70年 非戦・平和の道歩み続ける

門信徒、各国大使、国会議員など2500人参拝

戦後70年、第35回の千鳥ヶ淵全戦没者追悼法要が9月18日、ご門主ご親修により国立千鳥ヶ淵戦没者墓苑（東京都千代田区）で営まれた（写真左）。門信徒や僧侶をはじめ、国会議員、駐日大使など政財界や宗教界の2500人が参拝し、国籍や思想・信条を超えてすべての戦争犠牲者を追悼し、非戦・平和の誓いを新たにす。（次号に続報掲載予定）



この全戦没者追悼法要は1981（昭和56）年に始まり、毎年9月18日に営んでいる。



全戦没者追悼法要で御導師をつとめられるご門主（中央）＝国立千鳥ヶ淵戦没者墓苑＝

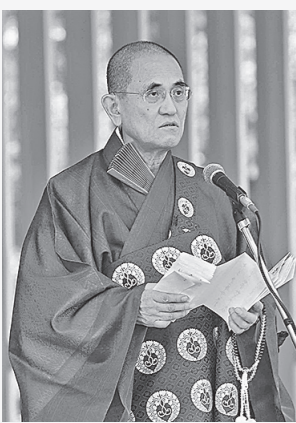
ご門主御導師のもと、法要が営まれた。ご門主は、法要の趣旨を示した「表白」で、自己中心の考えから幾多の戦争を繰り返し、かけがえない多くの命が失われたことへの痛みと悲しみ、そこから出発した戦後70年の歩みに学ぶことの大切さを述べられた。続いて「私たちの根本的な愚かさ、かつて戦争を支持した宗門の歴史を深く省みて、同じ過ちを二度と繰り返さぬよう、非戦・平和への道を歩み続けてまいります」と決意を語られた。

参拝者全員で「正信偈」をおつとめ（同下）する中、衆参両院の国会議員や米国をはじめとする各国の駐日大使ら来賓が焼香。法要後には、それぞれの思いを胸に焼香する参拝者の列が続いた。広島県呉市から団体参拝した西光寺門徒の新納正和さん（82）は「5歳の時に父が戦死。その後、空襲や原爆を体験し、みじめな思いをした少年時代だった。70年前の私と同年代の子どもの作文を聞き、終戦当時の様子が浮かんで涙がこぼれた。もう二度と戦争を起こしてはならないし、今の子どもたちに同じ思いをさせたくない」と語った。法要に先立ち、石上智康総長が「平和宣言」（別掲）を行った。また、宗門校の中高生2人が「非

世界中を戦禍に巻き込んだ悲惨な大戦の終結から70年の歳月が経ちました。ここ千鳥ヶ淵戦没者墓苑に参集されたみなさまと共に、戦争によって犠牲になられた5000万人にも及ぶ国内外すべての方々に、心から哀悼の意を表します。さらに、ご遺族の方々の消えることのない悲しみ、あらためて心に深く刻みま

に不信を抱き、武力を背景にした緊張の上で保たれる平和は、はたして真の平和のすがたといえるのでしょうか。戦争は怒りと悲しみを広げるだけの愚かな行為です。誰もがそのことを知りながら、繰り返される争いの連鎖を、私たちはなぜ、断ち切るこ

世界では今もなお各地で紛争が起こり、戦火の絶えることはありません。つねに世界のどこかで、戦火の火種を宿し続けているのが私たちの世界の実情です。国家や民族が互い



「煩惱成就のわれら」と親鸞聖人が述べられたように、どこまでも根深い欲望と愚かさ根差しているのが人間という存在です。そういう私たちにはありますが、阿彌陀如来の智慧の光に照らされて、その愚かさになんかかされるのです。おのれの内なる愚かさになんかかされた私たちは、常に過去の歴史に学び、愚かな過ちを再びおかさすことのないよう、また自己本位で排他的なあり方に厳しい批判的な目を持ち、この地上世界に平和が実現するよう努めるべき

石上総長の平和宣言（全文）

でありましよう。

縁起の真理に目覚められた釈尊は「一切の生きとし生けるものは、幸福であれ、安穩であれ、安楽であれ」と願っておられます。この世界に存在する命は、私たち凡夫の計らいを超え、縁起によって互いに深く関わり合っているのです。釈尊から2500年隔てた私たちの願いもまた、戦争のない安穩な社会で、皆ともに幸せに生きていくことにあります。この普遍の理想を実現するために、互いに排他的な憎しみの心を克服することに努め、尊い命を奪い合うという愚かな争いをこの地球上からなくすことこそ、皆が共有すべき目標であることを確認いたしまし

できる社会」とは、誰かを犠牲にして成り立つものではありません。一人ひとりが尊ばれる社会、互いに信頼し合える安穩なる世界に向けて、仏の智慧に教え導かれる念仏者として、これからも、いっそう力強く歩みを進めてゆかねばなりません。

『仏説無量寿経』に説かれた「兵戈無用」という武器なき恒久的な平和への願いを込めて、本日、全国の各寺院から平和の鐘が鳴り響きます。この鐘の響きに込められた平和への願いが、世界中の人びとへ、そして将来を担っていく子どもたちに届いてゆくよう、共に力を合わせてまいりましよう。

争いによって、多くの尊い命が失われてきた歴史を、決して無駄にはなりません。私たちが目指すべき「自他共に心豊かに生きるこ

2015（平成27）年9月18日
浄土真宗本願寺派
総長 石上 智康